Views from Orienteering

村越 真

東京カルチャーカルチャーで開催された「地図ナイト」。
サブカルっぽい切り口と、まじめさがいい具合にミックスされたイベントだった。
意外に女性が多いのが見て取れる。

座っている４人は、左から村越、今尾恵介氏（当日のスピーカーの一人。音楽雑誌の編集者だったが、地図好きが高じて、現在は地図に関する著作に専念）、小林政能氏（仕掛け人）、千葉達郎氏（読みやすい赤色立体図という画期的な地形表現を開発した技術者）。いずれ劣らぬ地図オタク

都市で地形萌え

１月５日、お台場の東京カルチャークラブで、「地図ナイト」という催しが開催された。僕自身は田島利佳に誘われて参加したのだが、オリエンテーリング関係者やアウトドア関係の地図好きの顔も見られた。

東京カルチャーカルチャーは、「カルチャー」とは謳っているが、次の月の催しは「壇密ナイト」だ。対象はむしろ「サブカルチャー」領域と言える。しかも、イベントの仕掛人は日本地図センターの小林政能氏。同センターは、国土地理院の地図販売を手がける財団法人で、お役所の出先機関。そういう機関の職員がサブカルっぽい視点で地図を取り上げていることが新鮮だ。

今回のテーマは、東京の地形。この分野ではフロントランナーである「東京スリバチ地形」の皆川氏と「東京凹凸地形」の今尾氏の掛け合いの内容は、僕の言葉で言えば「地形萌え」。タモリクラブやぶらタモリの影響もあって、一般の関心が広がっているテーマだ。

定員は 120 名なのだが、なんと当日券には長い行列ができ、結局入場できずに帰った人もいた。正月早々の週末にこれだけの人が集まるのが驚きなら、その 30%以上が 20 歳代後半から 30 歳代と思われる若い女性だった。その多くが一人で、熱心にメモを取りながら聞いているのが印象的であった。

この１年、私自身一般の人にナヴィゲーションや読図への関心を喚起するために、珍しい地形を「地形萌え」や「胸キュン地形」と呼んだり、あるいは都市地形といった変化球的切り口を開発してきた。地図／ナヴィゲーション／オリエンテーリングをさらに広い対象層に届けようとするとき何ができるかという点で、勉強になるイベントだった。

リスクマネジメントの必要性

２月は悲しい知らせが立て続けに届いた。

２月１０日には、西穂高の独標（どっぴょう）に登っていた静岡オリエンテーリングクラブの堀本夫妻のうち、堀本睦さんが滑落。自力で救助を試みた堀本洋さんとともに遭難。悪天候のために捜索活動が難航し、ご家族の願いもむなしく、１２日の朝に遺体で発見された。

また次の週１７日には、東京湾で強風の中をカヌー練習中の芝田敏仁さんと砂田芳子さんが、行方不明となり、その後死亡しているのが発見された。事故の詳細は分かっていないが、おそらく強風で転覆後、低体温症で亡くなったと思われている。お二人は２年前の MTB-O の日本代表であり、芝田さんは現在 JOA の MTB-O 委員を務めていただいていた。

いずれの事故も、オリエンテーリングそのものの中で起こったことではない。しかし、アウトドアでのちょっとした判断ミスが重大な結果につながったという点でも、オリエンテーリング仲間のアウトドアにおける事故死という点でも、長く記憶に留めると同時に、自戒の念に駆られる事故だった。４人の訃報に接した２週間は、「自分がこうして今、彼らの死について書いていられるのも、ただ運がよかっただけなのではないだろうか」という個人的な思いと、リスクマネジメントに携わるものとして、これまでしてきたことを振り返り、またこれから何をすべきかを問い直す日々だった。

改めて振り返ってみれば、オリエンテーリングにおける事故は、競技人口を考えれば決して少ないものではない。2006 年の全日本大会を含めて２件の心不全による死亡事故が発生している。また崖からの転落による死亡と見なされている事例もあった。これらはいずれも高齢の方の事故だが、世界的に見れば、2001 年のユッコラリレー、2008 年の世界選手権リレーで、駆けつけた選手が対応しなければ死亡していただろうと思われるトップ競技者の失血事故もあった。また日本では、低体温によるあわやの状況や手術を必要とする腹部の打撲など、いくつかの大事故もあった。私自身、７針縫うけが、骨折、あわや失明の事故にここ約 15 年の間に遭遇している。オリエンテーリングは、傷害保険の保険料は安いが、リスクの高いスポーツだという一面を持っている。

オリエンテーリングにリスクをもたらしているのは、第一に自然の中で行われることである。第二に、選手が自由にルートを選択できることである。いずれもオリエンテーリング競技の本質的な特徴に由来する。自然の中にはコントロールできないリスク要因（ハザード）が遍在している。急斜面、枝や木、場合によっては動植物・昆虫などはいずれもハザードである。そして自然の中にいること自体が、緊急時の搬送を困難にする点で、大きなリスク要因なのである。加えてルートを自由に選択できるため、競技者の行動を逐一スタッフが監督することができないことがリスクを拡大する。道迷いはもちろん、けがした時に本人が自力で移動できるとは限らない。ロードレース大会なら、スタッフか応援の観客のいずれかがそれに気づいてくれるだろう。オリエンテーリング大会では、発見されるかどうかは、運なのだ。

もちろん、リスクを恐れていては何もできないし、何も進まない。もちろんそれは蛮勇を奮うことでもない。恐れることではなく、常に意識すること、それによりリスクに備え、必要に応じてそれを回避する努力が欠かせない。

たとえば、夏合宿／冬合宿、それぞれにどんなリスクが想定されるだろう？それは合宿の開催場所によって異なるだろうか。また、そのリスクを低減するためには何ができるだろう。リスクをイメージができるようになれば、次にすべきことは、それに対する装備やスキルを身につけることだ。

リスクを想定し、それに備えることはアウトドアでは必須のことだが、残念ながらその意識はオリエンティアの中でも十分に高くはない。しかし、元々オリエンテーリングは、「ロスト」という将来に想定されるリスクを、プランニングとテクニックによって軽減させることが技術の本質である競技だ。競技会であれば、よりよい成績を残すためには、ロスタイムにつながるリスクを事前に想定し、それをできる限り減らそうと努力するだろう。競技上のリスクマネジメントの延長線上で捉えれば、安全のためのリスクマネジメントは決して特殊なことではない。競技に真剣であれば、ロスタイムを運と考えることはないだろう。安全上のリスクについても、「運が悪かった」と事後に言わずに済むためにはどうしたらいいのだろう。アウトドアに携わる限り、このことは意識からそらしてはならない。

（村越 真）

堀本夫妻が遭難した時、私は朝霧野外活動センターでナヴィゲーションとリスクマネジメントの講習の最中だった。どちらもアウトドアに必須のスキルだが、それを伝える機会はまだまだ不足している